アイスランドに住む人たち　　赤石五郎 (長房同好会)

アイスランドというと、氷の島、北極圏にある島、ヴァイキングが移り住んだ島、オーロラが見えるかも、いつかは訪れてみたい場所、この程度しかわからない。

テレビをつけたら、堤真一がアイスランドを訪れ、レポートしていた。最も過酷な環境に生活しているものと思いこんでいたのだが、普通の住宅があり、電気も通っているし水にも不自由はしていない。多少は不便ながらも快適な生活をしていると思えた。都会的な便利さを求めない人なら、理想的な生活を満喫できるだろう。自然がきれいである。島民はそれぞれ「身の程にあった暮らし」をしている。これがいい。

火山が噴火したら怖くないかとの問いに、「怖くないね、もっとも火山のうえに住んでいるのだから、噴火は当たり前。怖くはないね」と答えた。いつでも火山の活動に対する心の準備はできているのだろう。溶岩の流れが住宅街のそばまで流れ下った時に、溶岩に水をかけてその流れを止めたことがあった。灼熱の溶岩の流れに海水をかけて固まらせ、住宅の被害を最小限にとどめたのだ。よくそのような発想を思いついたものだと驚嘆するが、すでに先人がそれをしていた、伝えられていたことを実行しただけだという。

それよりも大変だったのは火山灰の処理だ。集落全体に降り積もった火山灰は２メートルにも達したという。「それをさ、ティースプーンでひとさじずつ取り除いたってわけ」と村人は笑いながら言う。村全体を覆った胚を、スコップを使って村人総出で人力によって取り除いたときの大変さをティースプーンでと言い表したのだろう。その人は最後にしめくくった、「時間をかければ、やれないことはない」と。

その人は会いに来てくれた堤に言った、「いつでも来てよ、わたしはここにいるから」と。「氷の島」に住む人の、心の奥底に横たわる寂しさと心の温かさが伝わってくる言葉だった。　　（2020/03/02）